

# 「聖地★巡礼—自分探しの旅へ—」 をふりかえって

大森 康宏 (おおもり やすひろ)

本館名誉教授  
立命館大学教授

巡礼者がたよりとする  
道標(スペイン)



世界には、さまざまな聖地があり、人びとは聖地を目指して巡礼する。人はなぜ巡礼をするのか。

巡礼とは遊び歩く楽しみと信仰の喜びが結びつき、歩くことで自身を見つめ、宿泊地で他人に出会い、癒される。そして心身の疲労からくる幻覚によって、神とめぐりあうように感じられるのが聖地への巡礼である。つまり歩く苦痛を歓喜に昇華させるものである。巡礼した後の人生の自己再生ルネッサンスが、なぜ今、求められているのか。緊張を強いられる不安な現代社会に生きる人びとは、そこに不思議な魅力を抱くようだ。

二〇〇七年三月一五日より六月五日まで開催された特別展「聖地★巡礼—自分探しの旅へ—」は、見学者自身がその回答を求めながら、世界遺産として有名なサンチャゴ・デ・コンポステラの巡礼路について博物館が独自に取材した映像を見たり、出会った人びとのインタビューを聴きながら、ストーリー展開を楽しむ展示となっていた。

展示の中心は、フランスからスペインの西の端まで全行程一三五〇キロメートルを歩くサンチャゴ・デ・コンポステラ巡礼を記録した映像である。ヨーロッパ人にとつての巡礼といえば、スペインの西の果てに位置するサンチャゴ・デ・コンポステラ大聖堂にある聖ヤコブの墓に詣でることである。そこはエルサレム、ローマと並ぶキリスト教三大巡礼地である。ヨーロッパ各地からの巡礼者が集う場所は、フランスの四つの町にある教会のひとつになる。それはロワール河流域にあるトゥールのサン・マルタン教会、同じ河の上流にあるヴェズレーのラ・マドレーヌ教会、中央山塊の南に位置するル・ピュイのノートル・ダム大聖堂、そして南フランスのアルルにあるサン・トロフィーム教会のいずれかに集合する。とりわけ多くの巡礼者が集まるのはルビ

ユイの教会である。フランス人の巡礼者、ミッシェル・ラヴェドリンさんと同行し、彼の話と解説を聞きながら映像による巡礼の旅が展開する。

この巡礼展示と並んで、一九世紀になってから奇跡の場所として聖地となったフランスのルルドや日本国内の四国巡礼、霊場恐山なども、高画質ハイビジョンを駆使した大型映像で紹介した。また、彫刻家の池田宗弘さんが描いたスペイン巡礼路の絵地図やスケッチ、写真家の野町和嘉さんの世界の巡礼写真など異なるメディアの組み合わせによってビジュアルな展示を実施した。さらに檀心みさんによる音声ガイドは視覚的巡礼を聴覚によってイメージを広げ追体験できるように工夫をほどこした。

展示場二階では、研究者の聖地ともいえる世界各地のフィールドで民博が取材した、日常では見ることの少ない映像を鑑賞できた。創設以来三〇年、独自の映像取材を続けてきた民博ならではの貴重な映像を、「同時代に生きる人」として、見学者自身の目で見るように展示した。

## 聴覚から映像へ

二〇〇〇年、わたしが実行委員長を務めた特別展「進化する映像」では、映像の歴史を視覚だけでなくモノに触れる感覚によって理解してもらうことも目指した展示であった。しかし今回の巡礼展示では、視覚的印象を強調するため、檀心みという一般の人びとに聞きなれた声の導入案内で映像への感情移入がしやすい工夫を試みた。この案内の声と、巡礼移動する映像のリズムとが一体となることから、来館者は一様に映像の主人公と一緒に巡礼している感覚を経験できるようにした。アンケートの結果を見ても、この点についての記述が

多かった。

さらにこの音声ガイドの機器は、来館者に一方的に無料で手渡すことにしたが、二〇パーセントほどの人は借りることなく入場していた。日本では音声ガイドの使用料金を徴収されるのが一般的なので、無料ということに驚きの表情を見せていた来館者が多かった。ガイドの内容については賛否両論あったが、ここではあくまでも、かつて檀心みさんが自分自身巡礼路を訪れたときの心情を語ることにとどめた。具体的な様子は登場人物のミッシェルさんが語るように企画した。聴覚を主にした導入展示は、視覚映像の効果を最大限に引き出すことに成功した。アンケート集計結果でも、この特別展が良かったと感じた人が八三パーセント以上いたことから判明する。

## 来館者の反応

前述したように、聴覚中心から導入する展示に対する驚き、とりわけ音声ガイドが無料であることに多くの人が喜んでくれたようだ。

展示の内容に関しては、視聴覚ハイビジョン映像を活用し、かつ大型スクリーンに投影する方式に、来館者は実体験をした気分になり、巡礼を実行したいという思いにさせたことは、展示としては成功したといえるであろう。

映像の構成と歩くりズム感、カメラ・レンズの向く方向といった点に注意して展示した。その効果が非常にうまく来館者の歩む見学移動スピードと合致していた。これも見る側心地よい感覚を与えていた。

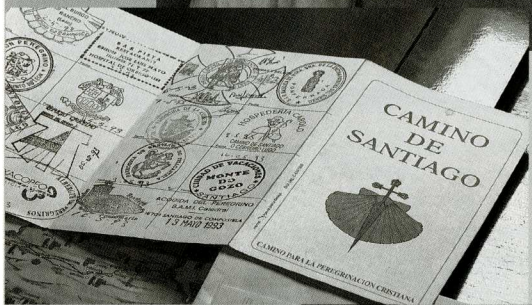
アンケートによると映像が伝える内容によって強く感じたことは、自分と向き合うことへの考えや巡礼に

よって身が軽くなること。そして、歩くことによつて自由になること、さらに巡礼が終わったあとと人生のルネッサンスを感じ再出発する巡礼者ミッシェルさんに感動したことなどが記入されていた。

こうした来館者の意見から、もうひとつのことが言えるであろう。それは来館者にとつて展示が良かったというよりも、「巡礼」という展示の着想そのものに誘発され、サンチャゴ巡礼がすばらしいという思いに至ったことである。今回、映像のもつ力によつて来館者を魅了したが、あつかった企画そのものが来館者の心をとぎめかしたようだ。



特別展「聖地★巡礼—自分探しの旅へ—」会場にて



サンチャゴ・デ・コンポステラ巡礼で使われている巡礼手帳



第347回みんぱくゼミナールのあとにおこなわれたサイン会(左)筆者(右)ミッシェルさん